

「秋田南外^{なんがい}の仕事着」
国登録有形民俗文化財
登録記念特別展示

南外の 仕事着は 語る

～野良着に込めた精神～
^{こころ}

【期 間】

前期◎平成26年6月16日(月)～平成26年9月21日(日)

後期◎平成26年10月1日(水)～平成27年3月 8日(日)

【場 所】

大仙市南外民俗資料交流館

【主 催】

秋田県文化財保護協会 南外支部

特別展示

特別展示と展示品について

「秋田南外の仕事着」は大仙市南外民俗資料交流館に収蔵されており、旧南外村が昭和51年頃から収集を進めてきました。このうち341点が平成26年2月24日に国の登録有形民俗文化財に登録されました。有形民俗文化財としては秋田県内では初の登録となります。また、登録にあたっては、「全国的に見て収集が少ない仕事着が多く残されている点」が評価されました。

今回の展示では前期に「春夏の装い」を、後期に「秋冬の装い」を中心に展示します。さらに、「刺し子」と「ナガテヌグイ（長手ぬぐい）」について、機能性と美しさに重点を置いて解説、展示します。

南外地域と仕事着の特徴

大仙市南外地域は古くから稲作を中心とした農業が主な産業で、豊富な山林資源を活かした炭焼きを行う農家もありました。昭和後期のあたりまでは労働力確保のため、家族総出で働きました。こうした状況の中、女性も重要な働き手とされ、農作業のほかに炊事、洗濯、裁縫、育児など家事一切を受け持ち、朝起きると同時に仕事着に着替え、就寝の直前まで仕事着で暮らしました。

当時は衣服の調達も非常に困難で、素材となる生地は自給自足か古着の再利用でした。それゆえ、貴重だった仕事着を長持ちさせるために生地の手立てや縫製方法など、経済性に重点を置いた工夫がなされました。

南外地域という農村の風土、気候、農耕条件に合うように意匠、設計されていることも重要です。また、一着の仕事着に異なる生地を組みあわせることで保温性や耐久性を高めたり、「刺し子」と呼ばれる縫い目模様を美しく、独特の形に仕上げることで強度を上げ、耐用期間を延ばすなど独創性に富んだ仕事着が残されています。



刺し子(さしこ)

○刺し子とは作業着やナガテヌグイなどに施された縫い目模様のことで、独創的かつ独特の模様が縫い込まれています。藍色を基調とした生地に白い糸が映え、あたかもちりめんのような美しさと高度な技術を感じることができます。

○女性は青年期に裁縫技術(針仕事)を一通り習得し、衣服を自作する技術をみがくことが大切とされました。

それゆえ刺し子は針仕事の技量を示す腕の見せ所でした。繊細で清楚な模様は作り手の女性の個性や感性を表しているようです。

○日中は野良仕事に明け暮れ、夜は機を織り、縫い、刺し絞る。農家の女性の生きた証^{あかし}が刺し子に刻まれているのです。

↑裏地にほどこされた
刺し子の縫い目

ウデノギジブ(登録No.134)

ナガテヌグイ(長手ぬぐい)

○ナガテヌグイとは女性専用のかぶりもので、長さが150センチ以上ある独特の手ぬぐいです。

発生時期ははっきりしませんが、少なくとも江戸時代末期には存在したようです。研究によると、昭和35年頃までは由利地域・鹿角北部地域を除くほぼ全県区域で着用されました。

○絞り染めされた木綿布の生地に裏あて布をあて、2枚の生地を合わせた裕(あわせ)仕立てになっています。中ほどに赤色などの短い結び紐が付けられており、色合いも大変美しいです。

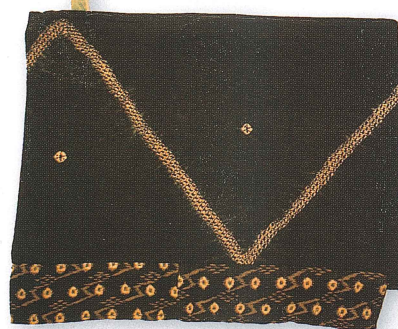
○布の端の部分は「ハネッコ」※と呼ばれ、刺し子や刺繍が丁寧になされています。この部分はかぶった時に肩の上に出るデザインになっていて、おしゃれを表現するポイントになっていました。

○絞り模様は年齢で異なり、若い人向け(未婚者向け)のものにはジグザグ模様(「ヤマミチ」と呼ばれます)が多いです。一方、年配向け(既婚者)のものには馬が歩いた足跡のような点々とした模様(「ウマガタ」と呼ばれます)が入っています。

※「マスヅケ」とも呼ばれる。



ナガテヌグイ(登録No.27)



ナガテヌグイ(登録No.16)

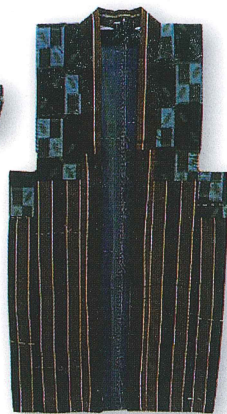


ナガテヌグイ(登録No.28)

上衣類



ウデノギジブ (登録No.134)



ハッピージブ (登録No.97)



ハッピージブ (登録No.228)



ボドコ (登録No.140)

○上衣類で登録を受けたものは214点です。
材質は木綿、麻がほとんどで、中には夏場の暑さをしのぐため、薄手のカラムシ※素材で作られたものもあります。

○「ハダコ」「ウデノギジブ」「テッポウジブ」など、用途や形状に応じて様々な名前があります。

○使用年代は昭和30年代以前のもものがほとんどですが、中には明治期から大正期に作られたものもあります。

○腕の上げ下げや曲げ伸ばしといった作業がしやすくなるように、関節部にゆとりをもたせたり、袖口が邪魔にならないようにすぼめたデザイン（テッポウ袖）にしたりと、随所に工夫がみられます。

※カラムシ：イラクサ科の多年生植物。古来から植物繊維をとるために栽培されてきた。

下衣類



モンペ (登録No.263)



モンペ (登録No.278)



スネコモンペ (登録No.279)

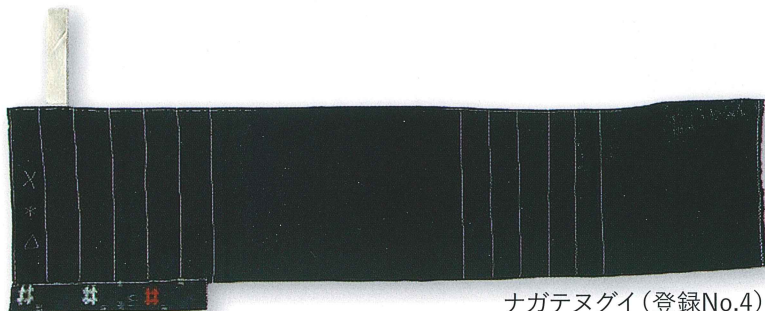


モンペ (登録No.280)

○下衣類で登録を受けたものは30点です。
形はモンペ型やズボン型となっています。
材質は木綿が中心です。大正・昭和初期に作られたとみられるものや、古くなった紐を外しゴムを入れなおしたものもあります。色は紺や黒の単色が多く、色あせや破れがあるなど大切に使われた跡があります。

○呼び方も様々で、「デタチ」「ドフラモンペ」「ガフラモンペ」「スネコ^{ひざ}モンペ」などの名称があります。また、膝から下の部分が細くなっているモンペは、農作業全般において動きやすいように考えられ、広く愛用されました。

かぶり物



ナガテヌグイ (登録No.4)



ナガテヌグイ (登録No.16)



タナ (登録No.18)

○かぶり物で登録を受けたものは47点です。「ナガテヌグイ」や「タナ」と呼ばれる独特なかぶり物が中心になっています。秋田県中央部では「ナガテヌグイ」が、秋田県沿岸部では「タナ」が使われましたが、南外地域ではこの二つのどちらも使われたようです。(ナガテヌグイは2枚の生地による^{あわせ}袷仕立てですが、タナは布の中央部に^{かすり}絁生地をあてたもので、デザインも異なります)

○農作業の際に頭部を覆い、顔を保護する目的もありましたが、作業で乱れた頭髮を隠し、田の神に対する尊厳を保つという宗教的・儀礼的な一面をも有するものでした。

○「メスダレ」という目の粗い網状の布も特徴的です。これは冬期間に雪目にならないようかぶり物に巻き込むように着用し、網の切れ端などを再利用したのももありました。



メスダレ (登録No.38)

帯・手甲・前掛け類



オビ (登録No.301)



テッコウ (登録No.312)



ウデノギ (登録No.295)



メダレ(マエカケ) (登録No.307)

○帯・手甲・前掛け類で登録を受けたものは27点です。材質は木綿が中心です。前掛け類は南外地域では「メダレ」と呼ばれました。このうち胸当て部分があるものは「ヤマアリ」、ないものは「ヤマナシ」と区別されて呼ばれたようです。

○手甲類は手の甲のみを覆うものと、肘近くまでを覆う「ウデノギ」と呼ばれるものがあります。土仕事による汚れが目立たないよう紺色や黒い木綿で作られています。

○帯類については作業着専用のものというわけではなく、他の衣類と兼用した形跡もあります。当時の流行や着用者の好みを反映したものが多く使われました。

脚絆類



キャハン(登録No.323)

ハバキ(登録No.327)

ハバキ(登録No.324)

- ^{きゃはん}脚絆類で登録を受けたものは14点です。
材質は木綿中心で、明治期に作られたものもあります。
- 冬の移動の際に^{すね}脛に巻き、^{わらぐつ}藁沓に雪が侵入しないようにと作られた「脛巾(ハバキ)」も残されています。材料はわら、ガマの茎などが使われました。
- 脚絆は田畑ではあまり使用されず、山仕事や大工仕事で使われたようです。

はきもの類



ワラジ(登録No.333)

アグドマギ(登録No.335)

アグドマギ(登録No.337)

ツマゴ(登録No.336)

- はきもの類で登録を受けたものは9点です。「ゾウリ」「ツマゴ」「アグドマギ」の3種類で、ゾウリとツマゴは^{わら}藁、アグドマギは木綿で作られています。
- 「アグド」とは方言で「かかと」を指す言葉で、「アグド」を「巻く」ように使ったことから「アグドマギ」と呼ばれ、かかとを厚い雪から守るためのものでした。くつ等で隠れてしまうものでしたが、細かい刺し子が施されています。

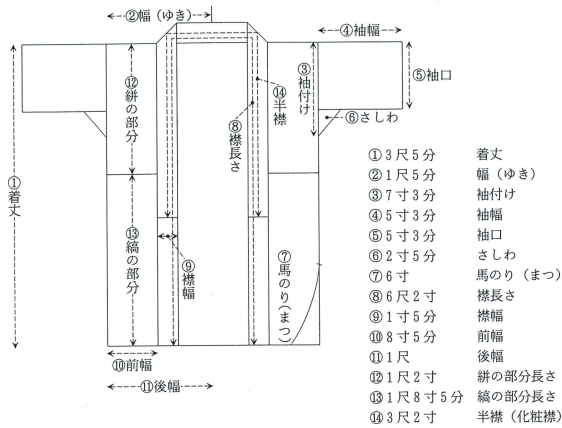
○これらの資料は実際に南外地域で使用されたものであり、製作及び使用年代もほとんどが昭和30年代以前のものであります。当時の農村における衣生活の実態を現代に伝える貴重な資料です。

【国登録の内訳】

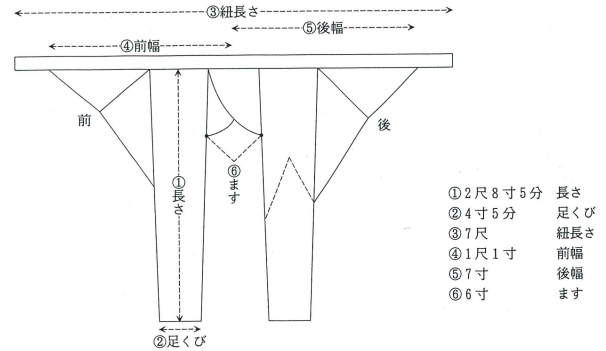
大分類	中分類	点数
仕事着	① 被り物類	47点
	② 上衣類	214点
	③ 下衣類	30点
	④ 帯・手甲・前掛類	27点
	⑤ 脚絆類	14点
	⑥ 履物類	9点
総計		341点

仕事着の寸法例と名称

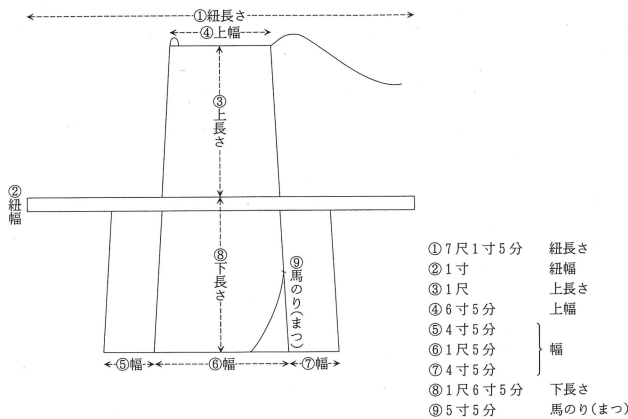
■テッポウジブ (女物)



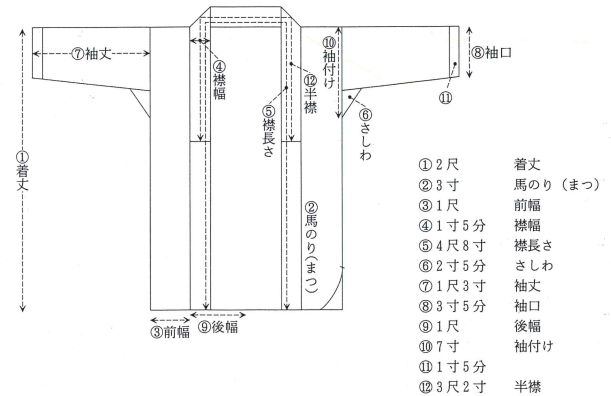
■デダチモンペ (スネコモンペ)



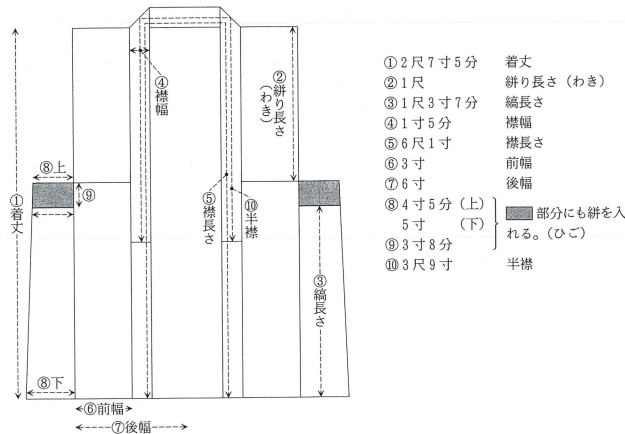
■ヤマアテ (前掛け)



■ウデヌキハダコ (女物)



■ハッピージブ (衿せ袖なし) (女物)



■作業衣上半身一覧表

名称	別名	摘要
マエカケ (メダレ)	アデコ、ヤマアデコ、マエダレ、メアカケ	前に垂れる
カタビラ	ユカタ	夏衣長着物
チュウト	衿せチュウト	冬
ハダコ	綿入チュウト	長着物 (秋、冬)
ソデナシ	袖無シ、ハッピージブ	肌着、一枚もの夏作業衣
コギン	コギンコ	綿入、合わせ
ナガレ	田打ナガレ	麻、カラムシ織の一重夏衣
ジブ (ジンプ)	テッポウジブ、サツマジブ (サツマ袖女子用)、ウデノギジブ (半袖)	七分袖

■作業衣下半身一覧表

名称	別名	摘要
ウチモンペ	田モンペ、ミチカモンペ	水田作業用
デダチモンペ	スネコモンペ	水田作業、町行き用
ガフラモンペ	マツカモンペ	長着物の上にはく
禪 (男)	六尺フンドシ、モッコフンドシ	六尺、四、五尺
腰巻 (女)	冬腰巻、夏腰巻	ゴロ、フラン、毛糸など
足巻	アグドマギ、アグドカケ	わらじ用
ハンパキ	ワラハンパキ、布ハンパキ、ハバキ	わらじ、地下足袋用

■かぶりもの一覧

名称	別名	摘要
手拭	ハテノゲ	ほおかぶり、鉢巻き
タナ	ナガテヌグイ	縫い目模様をつける
フロシキボッチ	フロシキ	矩形が多い
バフリ	サンカク (作業用、外出用)	二つ折、三角にしておく
肩掛け	ケット	耳掛けがある
		冬季、頭からかぶる

(出典「南外村史」通史編)

収集にあたって

- このたび国の登録を受けたものも含め、南外民俗資料交流館の仕事着は今は亡き二人の人物によって収集されました。
- その二人とは「今野隆栄」さんと「伊藤又四郎」さん。この二人の尽力がなければ、ここまでの収集は不可能だったと関係者は口をそろえます。今野さんは自らの随筆に「重く貴い先人の遺品は保存し続け、誰かが伝えていかねば」と記しています。
- 二人は仕事着の価値が時代に埋もれ、忘れられることを危惧し、一緒に農家を一軒一軒回って歩き、譲り受けた資料には全てに名札を付けて、大切に保管しました。
- 厳しい暮らしの中にも、精いっぱいのおしゃれを刺し子に託し、破れた箇所も補修にも当て布や縫い方で工夫を凝らすなど、農家に生きる女性の個性を表現し、想いを託したのが「南外の仕事着」です。今回の展示でこうした「野良着に込められた精神（こころ）」を感じていただけたら幸いです。



今野隆栄さん(左)と伊藤又四郎さん(右) 1992年頃撮影

残したい、伝えたい——「もの」「技」そして「こころ」



大仙市南外民俗資料交流館

〒019-1941 秋田県大仙市南外字松木田193番地1
電話 0187-74-2312

- 公開時間/午前9時～午後5時
- 休館日/毎週火曜日(祝日の場合は翌日休館)
- 入館料/無料 ● 駐車場/50台
- アクセス 鉄道✦JR奥羽本線 神宮寺駅から約9.7km
自動車✦秋田自動車道 大曲ICから約20分

